奔流

題字揮毫・梅原猛

«第22号»
■発行
千曲川・信濃川復権の会
〒184-0012
東京都小金井市中町2-5-13
FAX・TEL 042-381-7770
■発行人・市川　久芳（共同代表）
■編集人・矢間秀次郎（正 会 員）
■〒振替・00120-0-710488

«もくじ»

■特集：これ以上、海を毒壺にするな》との呻き声 ～ビキニ水爆実験から福島原発過酷事故への教訓～
2頁・福島原発事故による海洋汚染が問うこと……湯浅　一郎（正会員）
4頁・海の放射能に立ち向かった日本人……奥秋　聡（NHKディレクター）
7頁・流域スポット<2>
苗場山麓ジオパークの「消えた宝水」……中山　弘（新潟県津南町町議会議員）

大河の一滴（22）

朗読劇「線量計が鳴る」は、こうして生まれた

―百都市公演を目指して―

中村　敦夫（俳優・作家）

70歳も過ぎると、周囲の友人、知人がボツボツと倒れてゆく。ある者は事故や怪我で、ある者は重病で寝込んだ挙句、あるいは予兆なしで突然死する。

これを私は、「戦場の散歩」と呼んでいる。要するに弾がいつ、どこから飛んで来るのか、誰に当たるのか、合理的な説明のできないゾーンに入る。

たいていの人々は、このことに気づき、断捨離を進めたり、財産や記録を整理したり、または個人史を書こうと思ったりする。

私の場合は、自分の立ち位置を確認するために、本を書くことにした。七〇歳までの三年間、同志社大学大学院で行った講義録をまとめたものだ。

個人史、世界観、宇宙論、宗教観などが、アトランダムに交錯する。まるで言論の立体曼荼羅のような体裁になった。全体に漂う論調の響きは、「近代の終焉」であり、さらには、「小欲知足」を基本とする仏教的価値観の再評価である。本のタイトルは、「簡素なる国」（講談社）とした。

ところが、本書を印刷中の二〇一一年三月に、大地震と原発事故が起きた。

参議院議員時代から、環境政党の設立を目指し、重要テーマの一つとして、反原発を掲げてきた。しかし、この本に限っては、原発に関する記述は大きなものではなかった。個別の環境問題に言及する構成でないこともあった。また、危険を指摘しつつも、まさか自分が生きている間に事故が起きるとは思いたくなかったのも事実だ。

しかし、起きてしまえば、原発事故は戦争に匹敵する巨大テーマである。正面から取り組まなければ、表現者としての人生は完結しない。

残余の人生は、仏教研究と気ままな旅三昧で明け暮れようと企んでいたのに、まるで当てが外れた。

逃げ出すわけにはゆかぬが、相手は化けものである。何をどう表現すべきか、思い悩む日々が延々と続いた。

報道は断片的な情報をバラ撒くだけなので、一般の人々が全容を把握するのが難しい。

国策であるから、国は重要な事実を隠蔽する。電力業界は虚偽の発表を続ける。マスコミは、国家権力や広告の大スポンサーである業界の意向を忖度し、反原発の言論人を締め出す。まさに、大本営発表時代に逆戻りである。

私自身も、一から学び直し、問題全体を血肉で理解する必要を感じた。

福島の現場にも通った。チエルノブィリを訪ね、数十年後の福島の姿を捜した。資料を読み込み、専門家のアドバイスを受けた。

どんどん時が過ぎ、焦りも感じた。しかし、ライフワークになるだろうと予測し、納得するまで試行錯誤した。

五年後、やっと表現方法を思いついた。大げさな企画は、時間も費用もかかり過ぎる。ならば、たった一人で道具を背負い、日本各地で「朗読劇」を展開しよう。原発立地で生まれ育ち、原発技師として働き、原発事故で凡てを失った老人の独白だ。

その語り言葉を、現地の方言に置き換えた時、私はこのドラマが、予想を超えた迫力を生むことに気がついた。